

Title	「子カフェ」の可能性
Author(s)	蓮行
Citation	Communication-Design. 8 P.101-P.103
Issue Date	2013-03-29
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/24610
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

「子カフェ」の可能性

蓮行（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

Possibility of “KO-CAFE” (Child-Cafe)

Rengyou (Center for the Study of Communication-Design, Osaka University)

CSCD主催で過去に二度開催された子どもにまつわるカフェ、略して「子カフェ」。イベントのコンセプトを子どもに「まつわる」カフェとしている所以をはじめ、日常の様々なケースに起こる子どもに「まつわる」問題に対し、それを解決する糸口の一つとして、子カフェの持つ可能性を述べる。

キーワード

ワークショップ、子ども
workshop, children

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）では、2011年度と2012年度にそれぞれ1回ずつ、「子どもにまつわるカフェ」略して「子カフェ」を開催した。

元々このプロジェクトは、八木絵香、久保田テツ、蓮行の幼い子を持つ3教員が「子カフェ」をやろう、と言い出して始めたものである。ポイントは、「子カフェ」という略称が先にありきで、後から「子どもにまつわるカフェ」という正式名称が決まったという所である。

「子どもに関するカフェ」、「子どもカフェ」、「子と親のカフェ」ともう2年も前の事なので記憶は曖昧だが、その他いくつかの候補が挙がった。だが、少なくとも『最重要ポイントは「子ども」では無く、そして「親子」でも無い』というのが、3人の共通認識であった。

どういう事かと言うと、例えば第1回の子カフェ「子カフェ=あなたの隣の親子連れ=」では、理系の「小さい子供には触ったことはありません」という男性の学生が来た。彼は、「公共の場での授乳」について「考えたこともない」という立場で、そのテーマにおける対話や議論にどうにか参加はしていたけれど、とにかく「小さい子が周りをウロウロする」という事態に、強く緊張していた。子カフェは当然「子連れ歓迎」の催しなので、その時は託児のためのシッター業者を手配していて、同じ部屋の中で、乳幼児が遊んだり、議論している母親のヒザに乗っかりにきたり、という状況だったのである。

以上の事例が示すような、「子ども」を普段全く意識しない層にも、関わってもらいたい。だから「子どもに『まつわる』カフェ」と命名したのである。言わずもがな、少子高齢化が

これだけ社会問題とされている現代に於いて、「子ども」にまつわる有効な議論は、成立しにくいというのが実感である。首都圏では、満員電車でのベビーカーの是非という、子育て中の身からすればとんでもないと思うようなトピックが議論されていると言うが、毎日殺人的な乗車率であるラッシュ時に、「子どもは社会で育てる」などとは言ってられないという乗客の気持ちもわからなくもない。となれば、もはや鉄道というインフラそのものの在り方を、鉄道会社や自治体、勤務先や学校、子育てする乗客と子育てしない乗客という様々な利害関係者が、建設的に議論しなくては、解決の糸口は見つからないだろう。

正にその「糸口」を見つける方法の1つとして、私は「子カフェ」を断然推すのである。CSCDは大学の研究機関なので、そういった対話の方法や課題解決の方法を考え、研究開発し、世に出す使命がある。「子カフェ」は、自治体が主催してもいいし、我々のように大学の主催でもよい。企業がCSR活動の一環としてやっても良いだろうし、一般の飲食店がやるなら、顧客拡大にもつながるだろう。小学校や、保育園や幼稚園でもやってみてほしい。老人介護施設でもできる。

かつて「子ども」で無かった人は居ない。意識しようがしまいが、「子ども」に『まつわる』ことのない人は居ないのである。うちの近所でやってみようか、と個人的には密かな企みを抱いている。

